

眞鍋廣濟校

未刊
上方和歌集

古典文庫

眞鍋廣濟校

上方粗飲集

古典
文庫

古典文庫 第二七九冊

昭和四十五年九月二十日印刷発行

非売品

校者 真鍋廣濟

発行者 吉田幸一

未刊上方狂歌集

東京都杉並区和田一ノ一四ノ一三
印刷者 共立印刷株式会社

発行所 114 東京都北区
西ヶ原三ノ三四 古典文庫

振替口座東京一四五九七番
電話(九一〇)二七一七番

凡 例

一、この集には写字台文庫の未刊上方狂歌集の二種を収めた。

一、原本には丁数を打っていないが、いま元の姿を偲ぶよすがにもと、丁のオモテ、ウラを、「（一オ）」、「（一ウ）」のように示した。

一、異体仮字は通行文字に改めたが、ハ（は）と、ミ（み）だけはもとの字体を残した。原筆者の心を忖度したつもりで、他意はない。

一、歌の頭に新しく番号を打った。検索の便宜にもなろうかと思ったからである。

一、龍谷大学図書館司書課長平春生氏からは種種力添えを得た。併せ記して篤く謝意を表する。

昭和四十五年八月一日

真 鍋 廣 濟

目次

一、狂歌生駒山△龍谷大学蔵▽	五
二、狂歌誓ひの海△龍谷大学蔵▽	三五
○	
解説……………真鍋廣濟……………	三三

狂歌生駒山（写本）

龍谷大学蔵

ひなふりうたは、みつかきの久しきむかしより始まり、すかの根のななき代々に伝はれるに、わきて今のよは、やつのしまねなみ静かに、七つの道風治りて、いくはくのとしを経つれば、民草靡きよろこへる時にして、よろつのみちふるきを尋ね、すたれるをおこせるおり」(二ウ)なれば、此道もときを得て、おなし八雲の末とて、天かしたに広くたちわたれり

やつかれ、浅沢水のあさきころもて、難波江のなに弁へし事あらされとも、岩清水のきよきおきてにまかせ、柳の原のなほき教へをうけて、このみちに年を経、鏡となつけし集たひく撰ひ」(二オ)つるに、こたみやことなきおほんかたより、前の集かゝみやまにつくへきをあつめて、たてまつるへき仰せことなむありける、さるゆへ、垣をおもてにするのそしりを忘れ、道にふけるのころさしをのへ、池水のいひふり、秋の虫のさせるふしなき言の葉を、かいあつめて牽り侍る」(二ウ)なり、いろかなきことはの歌の林なれとも、仰せをうけ給はりつる君のあたりにたてまつる集なれば、生駒山となつくるも

のならし

寶曆十二壬午年

六月もちの日

栗柯亭木端

「(三ウ)

狂歌生駒山上

春　　哥

ことし春たちける日読侍る

栗柯亭木端

一　あのやまのいこましるへにはるや来し雪ふる年の道もまよはす

泰産亭州實

二　来る春を先ふるとしの内とりや長閑き風の手つけわたりて

泰果亭五百樹

三　正月をまち女郎か棹ひめのはるたちすかたとしのうちかけ

岫雲亭華産

四　うちよするとしの浪風静けくて春のきをふくしんきらう月

「(三才)」

木聖軒樊圃

五 鶯を空ねかときくとしのせきのこなたて春にあふ阪のやま

怡々哥青牛

六 御尋ねを申と年の内玄関はるの先供はしりこみたり

律師帰童

七 出替りに新参のはるををきつけて下地のしはすまたいにもせぬ

木村銀簫

八 としのうちに去年と今年の中頃をいひ改めてはるやたつらん

雨村舎不物

九 年のうちに春を盗んてたつた山夜の間にかすめをきつしら波

┌(四才)

辻栗條

一〇 としの尻に春との出いりさつはりと霞かたてひきして見せにけり

如棗亭栗洞

二 佐々木かや年の矢はつをあとにみて冬よりなる春の先陣

松風庵中葉

三 としのうちにまつ梅よりも難波江に春はかたあしふみ込みにけり

木 端

三 光陰の走りこくらに月の名の太郎におはる勝こしそする

四 正月は始まらぬのに年の木戸をしあけてはや春かいり込む

雨ふりけるに

「(四ウ)」

五 としのすそ雨に濡してまくつたか霞のきぬのはつかけを見る

青 牛

六 としの尻曳まはしたるかすみのきぬふんとしかしておさかりか降る

己卯のとしハ十二月十九日立春なりけれハ

山本呉蘭

七 年の矢を十本はかりいのこしたえひらの梅に春風そふく

庚辰のとしハ大晦日立春なれば

木 端

六 蓬来(ママ)の山路こさすにちかミちを一日はやくはるは来にけり

元 しきり壁一よぬる間をまちかねてみそかにうつる春の新たに

「(五才)

五 百 樹

三 正月をこよひ一夜にまちかねのみそかやとしの底にあるはる

坤井堂霄眠

三 ゆくとしの尾をうち豆にたちかへるたゝ山の蛇の巳の春かせ

修琴亭遥擲

三 つこもりの晩そといふて年の尻のたてひきを若い春か仕に來た

華 産

三 大ミそか酢のこんにやくのと事繁き中へかすみか曳くの山のは

樊 圃

二四 節季とてしかみの中へ春ひとひはさみいれたて暖なこと

「(五ウ)

陰山一洞

三五 大晦秤と共に初かすみ去年とことしをかけわけにけり

雪江舍素白

三六 としの内と外との間にはさませて霞の衣しはやよすらん

立春

百濟漁産

三七 はるたつといふはかりにやみよしのゝ染こしの様なかすみたな曳

栗 條

三八 わかやかにしはも命ものひにけり春たつけふのひのし当りて

としたつ日

木 端

三九 うれしきの心あまりて年毎にいふ言のはのたらぬ元朝

「(六オ)

山果亭紫笛

三〇 ゆめよりはよいと申さんあら玉の春のはしめに見るいこま山

霄 眠

三 耳初音鼻は梅か香口に餅目の正月もあかぬことふき

三 とし一夜彼扁鵲か術ならて去年のはらわた洗ふわか水

遥 擲

三 相かはらす福をえほうとしめ縄をよくとし徳の棚に曳はる

吳 蘭

三 こそことしのいた中ではなけれども不思議や心あら玉のはる

三 年と年土俵入りした明かたに東へなのるとりのはつこゑ

「(六ウ)

蔵鴉亭緑風

三 元朝のけしきを何にかゆへきそけに連城のあら玉の春